大槌中（岩手）で片付け

県内大学生らボランティア　生徒と交流計画

岡山経済同友会（岡山市北区厚生町）の呼び掛けで集まった県内の大学生らで組織する「東日本大震災復興支援ボランティア」が23日、被災地の岩手県大槌町に入り、津波の浸水被害に遭った大槌中で片付けに汗を流した。25日まで滞在し、同中生徒との交流も行う。

一行は県内の11大学・短大に通う36人と同友会会員ら計約50人。22日午後に岡山市をバスで出発し、約20時間かけて到着した。

現地の活動は、震災直後から支援を続ける国際医療ボランティア・AMDA（岡山市）が仲介。岩手県南部の沿岸部に位置する同町は、地震と津波で死者・行方不明者1200人以上、同中でも2人が犠牲になった。鉄骨4階の校舎は津波で1階の天井まで漬かって使用不能となっていた。

学生たちは2階部分を担当。ほうきやモップを手に教室の床にたまったごみやほこりを集め、割れたガラスなどを片付けた。アルバムや部活動のトロフィーなども搬出した。

くらしき作陽大4年渡部絵里香さん(21)は「校舎には楽しい思い出も刻まれているはず。最後の整理のお手伝いができて光栄」と話した。

ボランティアは復興を担う若者に被災地の現状を知ってもらおうと岡山経済同友会が企画し、昨年に続き2回目。（平田桂三）

大槌中の職員室を掃除する大学生たち

取材メモ

忘れてはならぬ被災地

▽…積み上げられたがれき、建物が消え、残されたコンクリートの基礎、倒れたままの墓石…。東日本大震災の発生から間もなく1年半になる。そこにあったはずの日常が想像できないほど、三陸沿岸に壊滅的な被害をもたらした津波の爪痕は生々しい。

▼…23日に岩手県大槌町入りした大学生ボランティアに同行、大槌中で献身的に作業する様子を取材した。「皆さんが来てくれた、そのことだけでありがたい」。鈴木利典校長の言葉は温かく、学生たちの、私の心に染みた。

▽…岡山で過ごしていると、いつの間にか被災地が意識から遠のいてしまっていることに気づく。「被災者にとって最大の危機は忘れられることである」との言葉を聞いたこともある。復興にはさらに長い年月が必要だろう。現状を胸に刻みながら「被災地を忘れない」との思いを強くした。（平田桂三）